

Title	實隆公記(伯爵三條西家藏版)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.4 (1931. 12) ,p.145(699)- 146(700)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19311200-0147">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19311200-0147</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

られ、又野山移入最初の地は寶藏院谷で、後、天正十八年木食上人に依つて伽藍地に移された。現在は御影堂寶藏に收められ、三五九卷存する云ふ。因に門院は法皇の御冥福を御自身前半生の奔放たる御生活を衷心悔ひ給ひ、又その罪を恐れて、後半生に於ける野山に對する御信仰は格別なるもので、女身なる故に禁制は犯されず、山麓の尼ヶ岡へ庵室を結ばれて、朝夕に大師の廟所を遙拜せられたのである。崩御は御遺旨に依つて御遺骨を野山往牛院谷菩提心院に收められた。これ今日の高野山陵である。

宋經は壽永三年冬、仁和寺宮道助法親王御灌頂の時、行勝上人止雨の法を修し法驗新なるものがあり、其の褒賞としてこの宋藏を下賜せられ、上人は之れを信仰の天野社頭に奉納し維新神佛分離の際其の受難の御蔭で野山に運ばれ勸學院の經庫に儲藏せらるゝに至り、三七四四卷を現存し、其の中三二四〇卷は福州本で、野山塔中分散のものを合すると三八五四卷に達する。

高麗藏は其の國寶の經庫と共に寄進に就いて異論されるも、其の經藏の慶長四年三月の額銘に依つて、石田三成が先妣の爲め木食上人を本願と仰いで寄進造營したことは明であり、六二八一卷を現存して居る。

猶ほ編者が大正十二年二月、美福門院の御隱栖地を訪ねし調査紀行「美福門院の舊蹟を索ねて」の麗文は荒河經の由來を物語り、これにより筆者が門院御隱栖地と御火葬塚と覺ぼしき所の存するを知り得たことを欣びとする。

又「秀衡經と荒河經の構圖と趣向」「宋藏と麗藏の構造と趣向に」「散佚せる藏經」「寶壽院藏經の經由に於て」の諸章に於て夫々記述

せられて居る。

目錄は秀衡荒河兩經は、函號・經目・卷次・缺卷次・卷數を、宋藏は函號・經名・譯者・冊目・缺冊次・冊數・刀・印造・摘要に分け、麗藏は函號・經名・冊目・冊數・刊年・刀・摘要に分けて列記し、各終尾に奥書を集録して居る。猶ほ本書の巻尾に五十音排列の目錄索引を附するなど頗る用意周到なるものがある。

以上は本書大要の紹介であるが、編者が佛事勤仕の暇に、かゝる大編を學界に提供せられし努力に對しては、たゞ「敬謝感激の外はない。本書の藏經研究者に多大の裨益を與ふることは勿論の事で又高野山學の研究を誘發せしむる導火線たることは筆者の信じて疑はざる處である。引續き上梓せらるゝ高野山學志第三編に於ては如何なる學界驚異のものが提出せられるか、其の早きを鶴首して居る次第である。(昭和六、一〇、二〇、夜武田勝藏記)」

### 實隆公記

(伯爵三條西家藏版)

實隆公記は、即ち前内大臣贈從一位三條西實隆公の日記にして、公二十歳文明六年より八十二歳天文五年其の薨去の前年に及び、まゝ殘闕あるも、前後六十有二年に亘つて居る。公の生涯は應仁文明の大亂より皇室式微時代に當つて、其の間寢食を忘れ心血を注いで皇室の再興を謀り、殊に延期に延期を重ねたる後柏原天皇の御即位の御儀を行はれしは、全く公一人の勳勞と稱せるも過言でない。公致仕の後、落飾して道號を耕隱、號を逍遙院、法名を堯空と稱せられた。公この前後、忙中能く寸閑を得て、和漢の學

を研究し、殊に歌道にありては其の奧秘に精達し、歌集「雪玉集」を殘され、又古今傳授に於ては忘るべからざる一人で、我が文學史上不朽の人物である。

本書は、上宮廷の小事より下文藝社會の雜事に至る迄、細大遺漏なく、讀者をして自ら遠く數百年の昔に生き、宛然として當時の世態の目前に回轉するの感を抱かしめる。猶ほ、本書の印刷に當りては公の遠孫伯爵嗣子公正氏等、其の原本に就いて嚴密なる校訂を加へられしものなれば、從來影寫本等の難解に苦しみたる學徒には無限の天幸と謂ふべきである。

因に實隆公の後裔には才學の士相繼いで輩出し、後世に諸書を殘し、殊に幕末國歩艱難の秋には、七卿落の一人として知られる季知卿出て、尊王攘夷を唱道し且つは復古の大業を翼賛し、明治昭代にあつては、歌道を以て明治大帝に側近し、後、大宮司として神宮奉仕せられ、其の養孫實義伯亦現に大宮司の職にあり、又其の嗣子公正氏は新進文學士で、既に國史國文に關する諸研究を發表せられ、又現に宮内省圖書寮にあつて大正天皇の御實錄の謹修に従事せられて居る。これ眞に名實兼備の皇室藩屏として敬すべきである。

終に、本書を刊行せられし、實美伯爵並に、校訂に當られし嗣子公正氏等に滿腔の敬謝の意を表して擱筆するものである。

(昭和六、九、十、武田勝藏記)

### 明治大正史、四、世相篇

(柳田國男編著)  
朝日新聞社發行

明治初年の吾が國の急激なる歐化主義政策と維新後の舊習一洗の思潮は、一時は保守的反應の機運さへ巻き起し、新舊思潮の衝突はあらゆる方面に過渡時代相を現出するに至つたけれども、時の推移は容赦なく押し進み、大勢順致の勢はひた押しに吾等を驅り立て、明治より大正に至る六十年間に政治に、經濟に、社會組織に、産業に、風俗習慣に目まぐるしい程の激變を引き起したことは、世人の既に實驗した所である。併しこの明治大正の吾が建設準備期も、今や一定の固有文化層を固定しかけて過去の歴史の一時期に参加せんとするに至り、人々は今更の如く此の過去六十年の歴史を物珍しく回顧せんとするに至つた。此の大勢を知つてか、知らずか、近頃やうやく一部の歴史家のうちには各の専門とする所に向つてこれが新資料の涉獵にいち早く取りか、つたことは、行き詰れる感のある吾が國史の學界にも、喜ばしい新展開の曙光を認め得る前兆である。歴史家は過去現在將來の前後に眼をくばるべきものであるとすれば、唯に茫洋たる古代の討究にのみその忠實を誇るべきものでなくして、過去を討究する態度で、同時に現代人の昨日今日の足跡をも討査して、過去と現在と將來との繋がりとの比較と關聯を求めるときは、歴史の研究にさり必要缺くべからざる要件である。吾人の生活と最も親しかるべき國史をして、餘所餘所しい、縁遠いもの、如く思はしむるに至つたのは、一部の國史家の罪でもあつたのであるから、研究家も此の點に顧慮してもつと自然科学者の如き態度と方法を以て、日常ありき